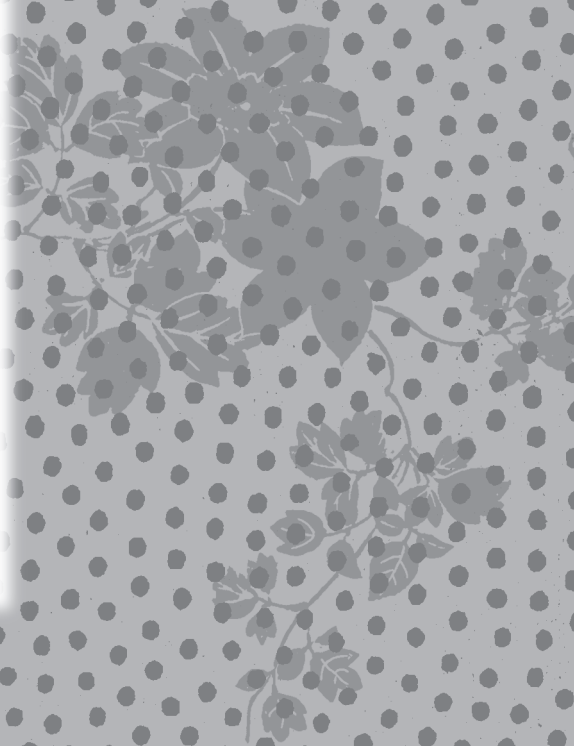


# 日本語学を

◎国広哲弥 著◎

≡≡≡  
斬る

研究社





## はしがき

研究社から何か本を書いてみないかというお誘いがあったのは十数年前のことでした。大変有難いお話なので、喜んでお受けしました。どういった種類の本を期待しているかというようなお話は何もなかったもので、どうしたものかと考えていると、それとは別のもう一つの仕事も頼まれました。それはタイラーとエヴァンズ共著の『英語前置詞の意味論』の木村哲也氏による翻訳の監修の仕事でした。その本は二〇〇五年に発行されました。私の専門の意味論の本でしたので、十八ページに及ぶ「監訳者注」を付けました。それから十年たちました。その間に家人が認知症になり、私は介護に多くの時間を奪われることになりました。

いろいろと試行錯誤的な草稿を書いている書き直す年月が続きました。そうこうしているうちに私は八十五歳になり、執筆と寿命の競争のようになりました。一方では、長年にわたってあちこ

ちに書いた拙論が世間ではあまり知られていないことが分かってきました。二〇一一年に発行された『図解日本の語彙』（三省堂）には当然載るはずの拙見が二つ欠けていました。「温度形容詞の体系」と金田一春彦氏の「第4種動詞」は「変化動詞」であるという拙見でした。ここで私は覚悟を決めました。多少おこがましくはありますが、私しか言っていないと思われる考えをとにかく集めてみようということです。そうして出来上がったのが本書です。

ちょうど時を同じくしてアメリカや日本で急に脳科学が発達してきました。その言語にかかわる部分は、私が長年疑問に思ってきたことを快刀乱麻を絶つがごとく解決してくれました。その一番大きいものはソシユール理論の否定です。

日本語学の定説をあまり尊重しないか見える私の態度には、私の言語学徒としての生い立ちが関係していると思います。私は旧制最後の卒業生ですが、旧制山口高校に入学したとき、一般の研究者とは異なって、日本語と英語に同じ比重をおいて勉強していくという大方針を決めたのです。そのために、英語にも類例があるというような指摘をしているところがあります。両々あいまって理解が深まるのではないかと思えます。

研究社の佐藤陽二さんには最初からいろいろとお世話になりました。随分時間が掛かりましてご心配をお掛けしたと思いますが、のろい執筆ぶりを匂わせるようなことは一切言われませんでした。本書の内容は研究社から出ている前の本の内容に反するところもありますが、その点も何

もおっしゃっていません。若き友人霜崎實さん(慶應義塾大学教授)は初稿に綿密に目を通してくださり、全体の構成の改善にまでご配慮をいただきました。記して、心からのお礼を申し上げます。

脳科学には興味は持っていますが、何しろ素人ですから、思わぬ誤解をしているかもしれません。そこらは次の世代の人たちに期待したいと思います。

二〇一四年晩秋

国広 哲弥

# 目次

はしがき iii

序章 言語観 1

第一章 日本語音素体系——ローマ字正書法を考える—— 15

第二章 動詞形態論——動詞に活用体系は存在しない—— 27

第三章 ル・タ・テイルについて——動詞語尾論—— 43

第四章 ソの社交的転用法——指示詞の領域説から心的視点説へ—— 67

第五章	ハとガについて(1)——日本語に格助詞は存在しない——	81
第六章	ハとガについて(2)——金田一説・久野説との比較検討——	105
第七章	語彙論と表現論——感覚を深く探究する——	115
第八章	展 望——これからの日本語研究に望むこと——	139
	あとがきに代えて——私が言語学の道に入るまで——	147
	参考文献	171
	索引	177





# 序章 言語観

## ■ はじめに

言語について何を論じるにしても、そもそも言語の本質が何であると考えているのかを最初に明らかにしておく必要があります。最近六十年ぐらいを考えてみても、アメリカ構造主義、変形文法、認知言語学と主流が変わってきました。日本語学に関しては、特に主義というほどのものはなく、昔からの方法に従っているのが大部分であり、今は仮に「伝統主義」と呼んでおきます。時枝誠記の「言語過程説」というのもありましたが、これは広く実践されるといふようなことはありませんでした。変形文法は英語に関してはさかんに試みられましたが、日本語に関しては見るべきものではありませんでした。残るソシユールの構造主義が一応定説ということになりました。うか。しかしこれはなかなか分かりにくい学説で、その考え方の本質は何であるかという議論ばかりが盛んであるような印象があります。ところが、最近私の頭の中では、考え方が急に進展してきました、ソシユールとはむしろ正反対の方向に向いてきましたので、最初にソシユールの考え方と比較しながら説明しておきたいと思えます。日本では今でもソシユールの説はもつとも優れていると信じている学者がいますので、よけいにこの問題は放置しておくわけにはいきません。

## ■ ソシュールの構造主義

スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure)の『一般言語学講義』(*Cours de linguistique générale*)は一九五〇年に小林英夫訳の『言語学原論(改訂版)』が出されて、日本の学界に大きな影響を与え、一九七二年に新訳『一般言語学講義』が出されました。ソシュールの言語理論は一口に「構造主義」と呼ばれ、今でも信奉している人が跡を絶ちません。それでは理論的な定説としてソシュールの構造主義を取り上げようと思います。ここで取り上げるということは、結論として否定するという含みを持っています。

ソシュール以前の言語学は言語の歴史的变化を明らかにすることを主流としていたのですが、ソシュールは歴史的变化の流れを追う前に各時代の全体像を明らかにするのが先決問題であると考へて研究しているうちに、単語に代表される言語単位は互いに対立することによってそれ自身の機能を發揮するのだという記号論的な考へに達し、音声にしる単語にしる「対立」なしには存在し得ないという性質を持つていることに気づいたわけです。それを「共時的研究」と呼びました。そしてある社会の人々は同一の記号体系を持つていることによつて意思伝達を成立させているのであるから、その社会共通の体系を明らかにするのが言語学の仕事であるということを強調しました。その体系を「ラング」(*langue*)と呼び、個々人がいろいろな場面で個人的に使う言語

は社会共通のものではないという理由で「パロール」(parole)と呼んで、言語研究の対象から外しました。そしてパロールと一緒に現実の使用場面も研究対象から外しました。つまりたらいの湯と一緒に洗っていた赤ん坊を放り出してしまったのです。ここにソシユール理論の失敗の原因がありました。言語というものが、人間が現実世界に生きていくための道具であることを忘れていたのです。

## ■ 記号と場面

人間が現実世界で記号を使うとき、どういう意図をこめて使っているのかを知るためには、その記号が使われている場面を知る必要があります。その実例として、車の警笛の意味を考えてみましょう。警笛は物理的には全く同じでも、場面が異なれば、千差万別の意味を伝えます。

- (1) 信号が青に変わった時：「早く発進せよ」
- (2) 車が一台しか通れない狭い道で、双方向から車が来て、片方が車を片寄せて止まって警笛を鳴らした時：「どうぞお先に」
- (3) 道を譲られた車が脇を通り過ぎながら鳴らした時：「ありがとう」

- (4) それに対して譲ったほうが鳴らした時：「どういたしました」
- (5) 高速道路で、速度の下限が決められているときに、それ以下の速度で走っている時：「もっと速く走れ」あるいは「これから追い越すぞ」
- (6) 先行車の後輪から煙が出ている時：「サイドブレーキが掛かったままですよ」
- (7) 先行のトラックの荷物が路上に崩れ落ちた時(警笛は数回鳴らすのが普通でしょう)：「荷物  
物が崩れ落ちましたよ」

このほかに様々な場合が考えられますが、その多くは社会常識から推定されるのが普通でしょう。この社会常識を欠いた人は「場の空気が読めない人」と言って疎外されます。

### ■ うなぎ文の扱い

具体的な場面での音声現象を「発話」(utterance)と言いますが、発話の意味解釈には場面情報が必要な役割を果たします。この問題を扱った研究は「ウナギ文問題」としていろいろと論じられてきました。その代表的なものとして奥津敬一郎(一九七八)があります。これは日本料理店で発せられた「ぼくはウナギです」は《ぼくが注文したい料理はウナギ料理です》という意味に解さ

れるが、それはなぜか、というものです。この発話意味の成立には、日本料理店にお客としてはいつた場面の意味が関わっています。場面が小学校の学芸会では《ぼくはウナギという魚です》という意味になります。奥津(一九七八:20)は料理店での発話の場合は「ダ(Ⅱです)はいわば動詞の代用として、文の述部を成すのである」と言っています。しかしこれはソシユールの実際の音声言語に強引に意味を背負わせた考え方で、とても納得できるものではありません。実際の場合には、「ぼく、ウナギー」だけで、「だ」が用いられない場合もあるわけですが、ここまで来ると、奥津流の無理は利きません。場面情報を我々の言語行動から省くわけにはいかないのです。

このレストランの場面は Schank & Abelson(一九七七)の中でも扱われています。つまり社会的のいろいろの場面では、そこで誰がどういう順序でどういう内容のことを発言するかが、社会的ルールとして決まっています。その中の変項の部分はブランクにして残されているという形になっているというわけです。ウナギ文の場合には注文主と注文の料理の部分だけがブランクにして残されています。奥津の「代用表現」などというのは、苦し紛れの辻褃合わせであったのです。ソシユールに従っていると、そういうことになります。

## ■ ソシユール説の問題点

ここで、ソシユール説の問題点をまとめておきます。

### (1) 場面機能の無視

### (2) 同音異義語の存在

単語は音声が異なること(≡対立すること)によって意味の異なりを示すということですから、同音異義語は存在することはあり得ないはずですが、しかし、現実には同音異義語は存在していますし、そう混乱は起こっていません。それは異なった場面と結びついて用いられるからです。場面を無視したソシユール説では、そういう助けは考えられません。「ゆくカワの流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」(方丈記)の「かわ」を「革」と取る読者はいないでしょう。流れるものは「河」に決まっているからです。ソシユールも同音異義のことは気にしていたのですが、ついにこの難問を解決することはできませんでした。この問題については丸山圭三郎(一九八三: 212-213)を<sup>1)</sup>ご覧ください。

### (3) 言語記号成立の堂々めぐり

説明の例として、「やま・かわ・たに」を考えてみましょう。この三語は音声がいかに異なることよって三つの異なる意味を区別します。しかしこの三語が出来上がる前の段階では各語の異なる音声はまだなかったはずですから、その異なる意味は何によつて区別したのか分からないし、区別の手立てもないということです。しかし実際にはこの三語は立派に存在しています。

ソシユールの言語記号の発生をめぐる説明は私にはまことに不可解ですが、ここではこれ以上立ち入らないことにします。あとで説明しますように、言語以前に興味というか、概念が脳中に生じるのであり、いずれソシユール説は否定せざるを得ないからです。

### ■ 言語の眞の発生順——脳科学による支援

白状しますと、私自身この言語発生順の問題には長い間悩まされ続けていたのです。一定の音声に特定の意味を結びつけるという事を一体誰がいつどこで決めたのか、ということなのです。ところが、最近脳科学がアメリカ、日本で急速に発達し、言語発生メカニズムもかなりはつきりしてきたことが分かりました。私はこの方面は素人ですから深いところまでは分かりませんが、七、



八年前の頃から Goldberg(二〇〇五)、Ramachandran の三部作(一九九八、二〇〇三、二〇一三)によってかなりの詳細が分かり、日本では池谷裕二(二〇〇七、二〇〇九)で確信を深めました。このあとに示す脳の断面図とそれに付けられた説明に見られるように、言語機能の発生がどのようになされるかが具体的に分かってきました。

Ramachandran は、人間が外界の事物を視覚で捉えたとき、脳にどのような反応が生じるかを図1のような頭部の断面図を示して説明しています。

右のような脳科学の考え方が教えてくれることは、人間の外界認識は、言語なしに直接に行われているということ。ソシユールは言語なしには何も認識できないと主張しましたが、それは飛んでもない誤りであったということです。P.T.で、ソシユールの言う言語記号がどのようにして生じるのか不可解であると言いましたが、それは当然のことであつたわけです。そこで脳科学の教えるところに従つて、われわれが言語記号を作る手順を考えてみましょう。

ある時に森の中を歩いていたとします。いろいろな樹や草、生き物に出会います。その名前はもちろん知りません。しかし名前こそ知らないけれども、相互に異なっていることは分かります。ここでは言語の助けなしに物の区別が出来ているわけです。これだけのことでソシユールの学説は崩壊します。言語なしに事物の差異が認知されるのです。かりに大きい角を生やしたカブトムシを見つけたとします。これは貴重な発見ですから、のちのちのために、そこがどんな場所であ

# 実物の書籍では引用された図版が入ります

図 1 Ramachandran (1998: 112)

眼球から出た神経線維は二つの並行した「流れ」に分岐する。外側膝状体(ここでは見やすくするために表面に書かれているが、実際は側頭葉ではなく、視床の内側にある)に向かう新しい経路と、脳幹の上丘に向かう古い経路である。

「新しい」経路は外側膝状体から視覚皮質に入り、ふたたび分岐して二つの経路(白い矢印)をとる。一つは頭頂葉の「いかに」経路で、把握、方位、その他の空間的機能に関与する。もう一つは頭頂葉の「何」経路で、対象の認知に関与する。これら二つの視覚路の発見は米国立精神衛生研究所(NIMH)のLeslie Ungerleider および Mortimer Mishkin による(この解説は、邦訳 1998 年版のものを邦訳 2011 年版により若干修正しています)。

© 1998 BY V.S. RAMACHANDRAN AND SANDRA BLAKESLEE. Reprinted by permission of HaperCollins Publishers.

るか覚えておこうと周囲を見渡します。そしてそこが栗林であることを確認します。そこらに栗のいがごろがつていることも確認します。以上のことはすでに示しました脳の断面図の「上丘」で判定されることなのです。つまり「場面」の同定です。次にカブトムシという虫についての認知内容は「視覚皮質」に送られ、それ以前の虫類の記憶と照合され、適当に区別認知されます。次の段階で、その虫の形と動き方に分け、動き方の内容はさらに「いかに」という脳の区域に送られます。こうして虫の名詞的特徴と動詞的特徴が区別されます。

こうして虫に類する過去の記憶とも照合された上で一応記憶されます。記憶脳では過去の似た記憶と混然と混じった状態のまま夜の睡眠状態に至ります。睡眠中に似た記憶は整理された上で、まとまった概念的な状態で記憶脳に回されます。その概念は必要に応じて音声と結びつけられ、語となるというわけです。いろいろな人が別箇にこういう作業をしますので、気をつけていないと、同音異義語が発生します。

## ■ 脳の意識層と無意識層（Ⅱ直観）

従来から、言語現象の分析に際しては直観に頼る傾向がありました。しかし同時に、直観は自分で理由もなく感じ取るものであって、あまり当てにならないという受け取り方をしていました。